

講話 題：「パウロの捉えた〈福音〉と私たちの生」 - 朴 憲郁

<はじめに>

Ⅰ パウロにおける「福音」 - 概観 -

熱心なファリサイ派として律法に精進し、ゼローテ派的な熱心さをもってキリスト教徒の撲滅に奔走していたパウロは、ダマスコ途上で突如、甦りのキリストと出会って回心した時点から、諸民族/異邦人への福音宣教の使徒として立てられ、派遣された(ガラ1:15~17)。彼のこの使徒職は、彼の捉える福音、すなわちイエス理解の根本的変革を伴う福音と不可分に結びついている。彼が最晩年に書いた「ローマの信徒への手紙」1章の1節以下と16~17節で福音を二重に規定しているが、そのことは、使徒がローマ書全体を通して弁護する「福音」理解の基本線を指し示すのに不可欠である。

ガラテヤ書1章11~16節と第2コリント書4章1~6節で立ち入って述べているように、パウロは、自分に対するイエス・キリストの啓示によって召命を受けた時に、福音を受け取った。福音とは、かつて預言者エレミヤに委託された神の言葉が彼を捉えたように(1コリ9:16をエレ20:9との対応!)、いかなる運命になろうとも使徒を捉える啓示の力(ローマ1:16)である。パウロは福音を説明し得るし、福音によって、また福音への奉仕によっていろいろと論証することもできるが、福音を変質させたり意のままにしたりすることはできない。福音に手を加えたり、ダマスコ途上で彼に現れたキリスト以外の「異なるキリスト」を宣べ伝えたりする者は呪われる(ガラ1:9と2コリ11:3-4参照)。パウロの語る福音の権威は神の権威であって、彼は「神の福音」によって神ご自身の言葉を告知する(1テサ2:2,8:9,13,2コリ11:7,ローマ1:1,15:16)。

その内容を問うならば、彼の語る福音は「キリストの福音」である(1テサ3:2,1コリ9:12,ローマ15:19,その他)。福音において、キリストの派遣と贖罪死と復活とによる神の歴史的な救済行為が問題となっており、そこでは和解者であり主であるキリストが姿を現す。それゆえに、「キリストを告げ知らせること」(1コリ1:23,15:12)と「福音を告げ知らせること」(1コリ1:17,15:1)は、パウロにとって相互に交換可能である。

パウロはダマスコ途上でキリストを、神の右に引き上げられた神の子として見た(ガラ1:16,およびその箇所を示唆する2コリ4:5-6)。キリスト教徒迫害者の彼にとって、これは根本的な転換を意味した。かつて教会の迫害者として若き熱狂的なファリサイ派であったサウロ(パウロ)は、(申命記21:22-23に沿って)当然ながら十字架での屈辱的な死を遂げた自称メシアなる国民誘惑者をキリストの中に見ていたのである。だが今や彼は、まさにこのキリストを、神が正しい(義)と認めてあらゆる栄光を授けたお方として見つめ直し、その方に仕える者となった。キリストは、律法の熱心者であり信仰の敵であった彼に出会った時(ガラ1:14)、ご自身に抵抗するパウロを受け入れ、罪人の彼に恵みを注いだメシアなる主、和解者として彼に出会った(1コリ15:10,2コリ2:14-15,ローマ1:5)。

パウロは今や律法に代わって、キリストを「律法の終わり」(ローマ10:4。新共同訳ではテロスを「目標」と訳す)として宣べ伝え、キリストへの信仰を救済の道として人々に告げ知らせる。彼は、自分のことを次のように認識していた。「私たちもかつてはキリストを肉的な仕方では知っていたのであるが、今やもうそのように知ることはない(2コリ5:16)と。パウロの回心直後から、諸教会では次のように彼のことが噂された。「かつて我々を迫害した者が今、以前には撲滅しようと試みた信仰を宣べ伝えている」と(ガラ1:23。使徒9:19-21も参照)。

パウロは彼の律法批判的なキリストを告知し始めたために、使徒としての召命を受けた以後、シナゴグとユダヤ教法廷との激しい衝突の中に巻き込まれたし(2コリ11:24以下参照)。律法に忠実なユダヤ人キリスト者たちは、パウロの福音の告知に疑念を抱き、批判し始めた(ガラ2:4-5、使徒15:1-2,5,24参照)。この論争の主要な証言

が、今日の我々にとってガラテヤの信徒への手紙であろう。そして、コリント第一と第二の両書簡とフィリピ書においてこの論争はさらに進み、ローマ書の中にも、パウロが置かれているそうした闘争的状况が反映している（ローマ3:8、15:20-21、16:17-18 参照）。いわば最初から、パウロの言うキリストの福音は論争されていたのである。

エルサレムの先輩使徒たちと共に、パウロはイエスの贖いの死、死んで葬られたこと、3日目の復活、ペトロと12弟子の前における復活のイエスの顕現などの福音を宣べ伝えた（1コリ15:3-5、11）。使徒はイエスの贖罪死の教説を、まったく彼独自のものとした（2コリ5:21、ローマ3:25-26、4:25、8:3 参照）。イエス自身に由来する聖餐伝承を、パウロは高く掲げた（1コリ11:23 以下を参照）。さらに、彼は諸教会に対して、自分を一つの模範として見習い、神と人の前で喜ばれかつ福音に適った生活の歩みを続けるよう指示した（1テサ2:9-10、4:1、フィリ1:12-13、16、20、3:12-17、その他）。

彼の敵対者たちに疑念を抱かせたものは、確かに彼の次のような核心的諸命題であった。「キリストご自身が私たちのために呪われたことによって、私たちが律法の呪いから贖い取った。というのも、『十字架に架けられる者はだれでも呪われている』（申命21:23）からである」（ガラ3:13）。また、「自由へとキリストは私たちを解放したので、今やあなたがたが堅実であり続け、またもや奴隷の軛（律法）に繋がれてはならない」（ガラ5:1）。とりわけ、「律法の業によってはどのような肉も（神の前で）義とされない」（ガラ2:16、ローマ3:20）。それと同様に、「私たちは、人が律法の業によらず、信仰によって（のみ）義とされると考える」（ローマ3:28）。パウロはローマ書に至るまで、今述べたこれらの洞察を守り抜いた。

使徒を突き動かしたものは、彼の宣教使信、彼のケリュグマ（*kh, rugma*、1コリ1:21、2:4、15:14 参照）、「福音」（救いの使信、喜ばしい音づれ）、いやそれどころか「私（たち）の福音」と呼ぶものであるが（1テサ1:5、ガラ1:11、ローマ2:16）、それは、彼が自らその中に立っていると考えた使徒的伝統であった。しかもこの伝統は、イエスによって決定的に刻印されている。すなわち、イザヤ書52章7節で喜びを伝える使者について、「彼は平和を聞かせ、良い知らせを告げ、救いを聞かせ」、「あなたの神は王である」と呼ばわって、神の王的支配の出現をシオンに告げ知らせる、と言われる（ナホム2:1もそれと類似）。イザヤ書61章1節では、神の霊によって油が注がれ、「貧しい者に喜びの知らせをもたらし」ために遣わされた、と語られる。初期ユダヤ教はこの聖書箇所を来るべきメシアとして解釈した。ルカ福音書4章16～21節とマタイ福音書11章2～6節（およびその並行箇所）から知られるのは、イエスが自分自身をイザヤ書61章1～2節に基づいて、貧者のために約束されたメシア的福音伝道者として理解したことである。そのような人として、彼は同時に、近づいてくる神の支配の告知者であった（マルコ1:14-15とその並行箇所）。それゆえに、イエスの使信（メッセージ）はすでに早くから、しかも事情によってはイエス自身とその弟子たちによって、「神（の支配）の福音」として特徴づけられた（イザヤ52:7と共にマルコ1:15を参照せよ。さらにマタイ4:23、9:35、24:14も）。イエスは地上に生きていた時にすでに、自分の弟子たちを神の国宣教に与らせた。そして、ルカ福音書9章6節によれば、彼らは「福音伝道者および治癒者」として、村々を巡り歩いた。

後に起こった復活と聖霊降臨の出来事によって、（主イエスによる）弟子たちへの宣教委託は生涯をかけた派遣へと変わった。その時以来、使徒たちは自己自身を新たな意味の福音伝道者として、すなわち天に高擧したキリストの委託によって「イエス・キリストの福音を」を告げ知らせる福音伝道者として自らを理解したのである（イザヤ書52:7の引用を含むローマ10:14-17：「ところで、信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう。遣わされないで、どうして宣べ伝えることができよう。『良い知らせを伝える者の足は、なんと美しいことか』と書いてあるとおりです。しかし、すべての人が福音に従ったものではありません。イザヤは、『主よ、だれがわたしたちから聞いたことを信じましたか』と言っています。実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。」）。

この福音がどういう内容であるかは、第一コリント書15章3節以下（最古の復活伝承）から知られ得る。宣教領域の問題（2コリ10:12-18参照）と律法問題を徹底的に論ずることはしないで、あのエルサレムでの使徒会議（A.D.48年末か49年初頭）に参集した使徒たちの中で、ペトロに委ねられた割礼者（＝ユダヤ人およびユダヤ教へ

の異邦人改宗者)に対する福音と、パウロとバルナバに委ねられた無割礼者(=異邦人および神畏敬者[ユダヤ教シナゴグ礼拝に参席した求道的異邦人])に対する福音とに分けて、両者の役割分担が決定され合意されるに至ったのである(ガラ2:7-8)。使徒は、自分が書き送った多くの手紙の中でこの福音を擁護し、第一コリント書15章8~11節とローマ書10章14節以下において彼は、自分の宣教委託と他の使徒たち、もしくは「良き知らせの告知者(=福音伝道者)」(イザヤ52:7、ナホム2:1参照)とが同等・同質であることを強調する。

つまり、パウロは彼の「福音」の語りを、自分に先立ち、自分と並ぶ他の使徒たちから受け継いでいる。ただし、同じこの福音のどこをどのように、パウロが取り立てて強調しているのかは、彼が福音を第1コリント書1章18節で「十字架の言葉」と言い、第2コリント書5章19節では「和解の言葉」と呼んでいるので、これらの箇所から明かとなる。すなわち、パウロ的なキリスト告知の中心には、キリストの十字架による神の救済行為があり、それによる人間の信仰と新しい生は真剣に取り上げられる。パウロの目下の宣教がどのように映っていたのかは、いくらかの示唆によってのみ知られる。パウロは他のキリスト教宣教者たちのように信仰と回心を呼び求め(1テサ1:9-10参照)、聖なる書物(旧約聖書)の教師として働き、(イエス)伝承を自分で受容しつつ、さらに他の人に伝えることをし(1テサ4:1、1コリ11:23、15:1以下を使徒18:7、11、19:9-10と共に参照!)、諸教会と個々の信徒(例:フィレモン書)に手紙を書き送り、彼らを世話することで衰弱した(2コリ11:28-29参照)。彼はただ時折、経済的な支援を受けた(フィリ4:10-20参照)。たいてい彼は、自分の生計を(皮)天幕作りとして自分で調達しようと努めた(1コリ9:6、2コリ11:7以下、28、使徒18:1-3参照)。

II パウロの捉えた「福音」(上)の補足的・個別的解説)

1. ユーアンゲリオン(福音)

キリスト論の諸局面(キリストの高挙、来臨、最後の審判、救済など)は、パウロの宣べ伝える福音の中核を占める。ところで、この福音(ユーアンゲリオン)に関しては、預言者イザヤが、喜ばしい知らせをもたらし、平和を告げ、良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、「あなたの神は王である」とシオンに向かって言う使者について語っていた(イザ52:7)。使徒パウロもこの預言を引用するが、そのことを語る彼の言語(ローマ10:14-17)からすれば、福音と使徒職に対する彼の理解は彼独自のものではなく、イエス時代にまで遡る一連の伝承に係わっている。従って、それはまた、原始キリスト教的・使徒的な「福音」とヘレニズム・ローマの皇帝礼拝における喜びの使信との峻別をも認識させる。というのも、当時の皇帝碑文(例:紀元前9年、小アジアのプリエネの碑文)に刻まれたユーアンゲリア(複数)とは、そのつど人々の感謝奉獻がなされる皇帝の誕生や支配継承、勝利や慈善行為など、数々の良い知らせに用いられたからである。アレクサンダー大王の時代以来、支配者は神の権化として幾度となく崇拝された。そのような「福音」用法はイエスと使徒たちとパウロに知られていたと推測される。しかしそういった用法は、彼らの宣教の言葉に何らの影響も及ぼさなかったし、諸教会でのキリスト使信の理解にもこれといった目ぼしい影響を与えなかった。

パウロと彼に先立つ使徒たちは、ギリシャ的用法とはまったく内容を異にする唯一のユーアンゲリオン(単数、ガラ1:6-9参照)を宣べ伝えた。とりわけ、この言葉がパウロの思考の中でいかに高い位置を占めていたかは、最も短いフィレモン書をも含めて、彼のどの文書にもこの語が欠けることがないことから明かである。彼にとっては福音の中に、キリストにおける神の究極的な救済意志が要約されている。

イザヤ預言からイエスを介して使徒たちに至るユーアンゲリオン理解の経緯は、次のように跡づけることが許される。イザヤ書52章7節(およびナホム2:1)によれば、神に遣わされた喜びの使者[メバッセール]はイスラエルと世界に向かって、間近に迫った神の支配の開始を予告した(イザ40:9も参照)。この知らせを携える者はイザヤ61章1~3節によれば、神の霊を注がれた預言者でもあった。イザヤ書のこの両テキストは初期ユダヤ教の中で、一部終末的-メシア的に解釈されていた(クムランの11Q Melch 2,6.15ff.と4Q Frag.文書を参照)。これと同じ時代環境の中で、福音書(マコ1:14-15とその並行記事、ルカ4:16-21、7:18-23とその並行記事)によ

れば、イエスは先の両テキストを彼自身の人格と神の終末的支配の使信とに関連づけ、(復活以前に)彼の弟子たちをこの喜びの使信の宣教に当たらせ(ルカ9:1-6とその並行記事) 遂には自己の犠牲の道行きをやはりイザヤ書(43:3-4と53:11-12)から解明するよう彼らに求めた(マコ9:31、14:24、及びイエスに遡り得る10:45)。

その後、復活の事件によって、同一の弟子たちが神の右に挙げられたキリストによって、パルチアの時まで使徒として召された。今や彼らの使信は、もはやイエスが宣べ伝えた「御国の福音」(マタ4:23、9:35、24:14参照)のみでなく、むしろイエスの派遣・犠牲行為・主キリストとなる高挙によって樹立された、神の支配の福音となる。この新たな内容を盛り込んだ福音は、すでにエルサレムにおいて学習定式で要約されていた。しばらくして後、パウロはあのダマスコのキリスト顕現によって、自分も使徒的な福音宣教者たち[ユーアンゲリゾメノイ]の列に加えられ、高挙のキリストから福音宣教を委託されたと見たのであり(ローマ10:14-17) やがてエルサレムの復活告白定式(1コリ15:1-11)をも受け入れた。

2. 新しい時の到来としての福音

さて、パウロは「福音」の到来を、旧約時代以来の選びの歴史における画期的な出来事として把握する(2コリ3:4-18、5:18-21) すなわち、神は「和解の言葉」の制定(2コリ5:19)によって、シナイ山で公布した古い務め/奉仕(ディアコニア)を取り除き、新しい契約(エレ31:31-34)を実現させる。こうして、律法と福音は「古い契約」と「新しい契約」として対置され(2コリ3:6、14) その奉仕者との関係で言うならば、モーセの務めと使徒の務めは対置される(0・ホフィウス、『パウロ研究』、15頁以下参照) つまり、モーセは律法(トーラー)の伝達者であり、パウロは福音に仕える(ローマ15:16も参照)使徒である。モーセが仕えるトーラーの文字[グランマ]は、(それが罪人を最終の弾劾判決[カタクリシス]に引き渡すことになるので、)人を殺す。しかし、パウロが仕える福音の内に宿る「霊」(2コリ3:17ではキリストの霊)は、人に永遠の命をもたらず。使徒はかえって罪人を最終判決から守り、神の前で義と自由に与らせる。確かにモーセの奉仕もパウロの奉仕も、神から出た栄光に適っているが、後者の奉仕の栄光は前者のそれを消え去らせるほどに優れた輝きを新たに放し続ける(2コリ3:10) だがなおも主の再臨まで、この二つのディアコニアは、シナゴグとキリスト教会に象徴されるように、併存するので、キリスト者はしばらくの間、古い時と新しい時という二つの時の中に存在することになる(2コリ3:18)。

3. 和解の福音

使徒の捉える「福音」の諸展開を引き続き追っているが、第二コリント書5章19節によれば、神の福音は「和解の言葉」である。動詞のカタツラセイン(和解する。1コリ7:11、2コリ5:18-20、ローマ5:10)と名詞のカタツラゲー(和解。2コリ5:18-20、ローマ5:11、11:15)は、新約聖書の中でパウロ書簡においてのみ初めて神学的に用いられている。つまりそれは、特にパウロの関心事である。使徒とその教え子ら(エフェ2:16、コロ1:20、22参照)がこの言葉を使用するのは、神の行為としての和解と、その行為による信徒間の現在の救いの獲得とを表示するためである。聖書外のギリシャ精神やヘレニズムのユダヤ教において「和解」が語られるのは、今まで敵対し合った人間(グループ)間の私的、政治的な平和締結が特に問題となるテキスト(1コリ7:11もその例)においてである。だが同じヘレニズム・ユダヤ教のテキストでも、神が人間の執り成し行為に動じてご自身の怒りを捨て、個々の人間またはイスラエル全体と和解する、ということがすでに言及される(2マカ7:33、フィロン『モーセの生涯』2:166、ヨセフス『古代誌』3:315など参照) ここでは神に対する人間の作用によって引き起こされる和解が語られるのに対して、新約聖書の和解のテキストは、神自身の自由な恵みによって実現された和解について語る。すなわち、人間が自己を神と和解させるのではなく、神が先手を打ってキリストの贖罪死による神なき人間への義認と和解を拓くことによって、人間とその世界が神と和解させられるのである(2コリ5:18-19) 神は何ら罪過なき御子を世に派遣して、我々のために罪の担い手(贖いの犠牲)とした。このような仕方、つま

り「キリストにおいて」神は世界を自己と和解した。それは、我々がこの包摂的な贖罪行為によって神の義に与るためである(2コリ5:21。ローマ5:1-11の和解は信仰者の義認の結果である)。

こうして福音は、神の先手による和解の業を知らせて救いを起こすことによる、生きた「和解の言葉」なのである(2コリ5:18-21)。ここでは、贖罪と和解は分離され得ない。

4. 十字架の言葉

次に、使徒は自分に託された福音を「十字架の言葉」[ロゴス・トゥー・スタウルー](1コリ1:18-19)と呼ぶ。彼はこの用語によって、スタウロス(十字架)の出来事の二つの側面を見つめるが、それらは「パウロの十字架の神学」の本質をなす。第一の側面としてパウロは、神が十字架の出来事により、ユダヤ人と異邦人から成る終局的な救済共同体(そして全被造物)の希望に満ちた解放[アポリュトウローシス]をもたらした、と確かに考える。つまり福音の中で、この出来事はまったく神の最終的な救いの業と呼ばれる(1コリ1:13、30、2:7-8、12、他を参照)。だがもう一方の側面からパウロは、十字架および十字架にかかったメシアの使徒的宣教がもたらす分離的効力をも見据える。つまり、十字架の言葉たる福音において諸霊は二グループに分かれる。その一つは、十字架の言葉を拒み、それゆえに最後の審判において滅ぶグループであり、もう一つは、その言葉を従順に受け入れ、こうして終局的な救いを受けるグループである(1コリ1:18、23-24参照)。十字架の説教がもたらす救いと災いの事柄は、パウロによってきわめて厳密に仕上げられ、パウロに特徴的な神学的関心事として語られる。

先に述べたように、十字架はイエスの敵にとって律法違反者に課せられた神の呪いの場(申21:22-23)であって、十字架にかかり神に引き上げられたメシアのイエスのことを語るキリスト教的説教などは、多くのユダヤ人にとって腹立たしい事柄であった。パウロは自らこの苦い経験を味わった。ヘレニズムの教養あるギリシャ人とローマ人にとって、十字架と十字架の説教は忌み嫌うべき不合理なものであった。スタウロスという見出し語やスタウロスにかけられたキリストに関する語りかけが、ヘレニストたちにどのように作用したのかを正しく評価するためには、キケロが十字架刑を「科せられ得る最も残忍かつ不快な死刑だ」(Verr 2.5.165)と述べた言葉が、ここで思い起こされてよいであろう。いわば、十字架の言葉は多くのユダヤ人とギリシャ人にとって救済使信ではなく、神の本質と救済意志とを逸する愚か(モーリア)であり、憚るべき無意味なものと映る。

しかし、無意味に見える十字架の告知は、この世の独断的知恵を打ち崩す(1コリ1:19、21)。それに対して、神のこの打ち崩しを甘受し、神と救済について自分で設けた宗教的・美的基準を放棄し、耳に響く十字架の使信を自己の内側に働かせる心の備えある人には、「宣教の愚かさ」のもつ救済的意味が明らかになる。彼らには、躓きの十字架の出来事の中に、世の知恵に対置する神の知恵(1コリ1:20節)を見出すことが許される。

III 私たちの生に係わる「福音」

1. 究極的な価値と目的を付与する福音

社会変動による人間の所属喪失、漂流化(明治時代から現代までの日本人社会)を見据えて。

上位のある物・人・事柄(思想など)に至上価値を見出して全面的に依存し、それを目指して生きることを生き甲斐としていた人が突如、それを喪失する転機を迎える。それは信じる対象をもたない、否、もつまいとする人間の生き方を促す(孤独化、自虐、自殺?)。しかし、それは相対的な価値・目的から絶対的な価値・目的への転機ともなり得る。真の所属への招きとしてのイエス・キリストの福音

ローマ書14:7~9 究極的な喪失と再生の出来事としてのイエス・キリストの十字架死と復活。それは相対的価値から絶対的価値への転換を人間の生にもたらす。

2. 信仰の世界への招きとしての福音

科学主義の現代: 科学の発達がか科学主義へと人間を駆り立て、さらに無神論的、唯物的な思考と生活をもたらす

不信仰の時代！だが人間は、科学万能の夢の挫折・崩壊を経験する時、信仰の世界・人格の世界に気づく。

（神信頼／神信仰）自己信頼に生きたパウロは、神の律法を遵守し、良い行いや優れた功績を積むことによって神の前に義とされ、命に与れると確信していた。それは、神の名において神なしに生きる彼の人生観の基礎であった。しかしある日、彼は甦りのキリストとの不思議な出会いによって、自分の従来のもうした古い生き方が滅び、それと決別する体験（ダマスコ体験）をした。…神の義に生かされる生への転換 ローマ書 1：16～18

3. モラル再生の原動力としての福音 - イエスの十字架死における神の義 -

モラル崩壊の社会 人間の内面から外に生み出される平和、正義、愛、奉仕。パウロ神学において、それはキリストの恩寵（福音）に基づく新倫理の確立である。

<結び>

<パウロ神学関連の参考文献>（一部）

1. Walter Klaiber, Rechtfertigung und Gemeinde, Eine Untersuchung zum paulinischen Kirchenverständnis, Göttingen 1982.
2. Rudolf Pesch, Römerbrief, NEB Bd.6, Würzburg 1983 (4. Auflage 2002).
3. ウルリッヒ・ヴィルケンス、『ローマ人への手紙』（1 - 5章）EKK新約聖書註解、教文館、1984 (Ulrich Wilckens, Der Brief an die Römer Neukirchen 1978, EKK VI/1)
4. Jürgen Becker, Paulus, Der Apostel der Völker, Tübingen 1989.
5. Peter Stuhlmacher, Biblische Theologie des Neuen Testaments. Bd I, Göttingen 1992.
6. Eduard Lohse, Paulus : eine Biographie, München 1996.
7. 朴憲郁、『パウロの生涯と神学』、教文館、2003年。（韓国語訳、2005年、大韓基督教書会）